

スポーツコミットメント尺度の作成 —信頼性及び妥当性の検討—

平野 貴也¹⁾

Development of a Sport Commitment Scale : Examining Reliability and Validity

Takaya Hirano¹⁾

要 旨

本研究の目的はスポーツへのコミットメントの度合いを測定するスポーツコミットメント尺度を開発し、その信頼性及び妥当性を検討することであった。フォーカスグループインタビューを用いた予備調査によって得られたテキストデータから、スポーツコミットメントに関する7カテゴリが得られた。それらをもとに28尺度項目を作成した。次に210名の大学生を対象とした本調査のデータについて探索的因子分析を行った結果、18項目6因子（「楽しさ」「他者からの期待」「投資」「機会」「称賛」「有能感」）の構造が確認され、スポーツコミットメント尺度とした。α係数及び再テスト法によって信頼性が確認された。妥当性については技能レベルと参加頻度の観点から確認がなされた。分散分析の結果、技能レベルと参加頻度ともに「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」の4つの因子について有意な差が見られた。技能レベル及び参加頻度の高い者はスポーツコミットメント得点が有意に高かった。「楽しさ」因子と「機会」因子の妥当性が確認されなかったことが課題であり、本尺度の改訂の余地が残された。

キーワード : スポーツコミットメント, フォーカスグループインタビュー, 技能レベル, 参加頻度

Abstract

The purpose of this study was to develop a measurement scale for sport commitment and to test the scale's reliability and validity, and its relationship to performance level and participation frequency. In a pilot study using a focus group interview, 7 categories on commitment to sports were found. Based on those categories, 28 items to measure sport commitment were created. An exploratory factor analysis using the principal factor method with promax rotation was conducted on 210 university students. The factor analysis demonstrated that sport commitment consisted of 18 items and 6 factors. The factors were enjoyment, expectancy from others, investment, opportunity, appraisal, and self-efficacy, and were named the sport commitment scale. Cronbach's alpha was .71-.92, indicating good internal consistency. Test-retest reliability was .61-.75. The reliability reached an almost allowable level. The sport commitment scores were tested based on performance level and participation frequency using one-way analysis of variance and multiple comparisons. The result showed that both performance level and

¹⁾ 名桜大学人間健康学部 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1
Faculty of Human Health Sciences, Meio University, 1220-1, Bimata, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

participation frequency had significant differences in the four factors: expectancy from others, investment, appraisal, and self-efficacy. In addition, higher performance level and participation frequency showed more sport commitment, whereas enjoyment and opportunity factors were not confirmed as exhibiting high validity. Thus, there remained to develop a new scale with higher reliability and validity in future studies.

Keywords: sport commitment, focus group interview, performance level, participation frequency

1. はじめに

人々が生涯にわたって健康に生きていくためには、若年期からスポーツ・運動を生活の中に取り入れ、ある特定の時期だけに実施するのではなく、継続的に行うことが望ましい。

スポーツや身体活動への継続的な取り組みを説明する概念としてコミットメント、社会化、参与、ロイヤリティ、専門化などが挙げられる。

コミットメントの概念をスポーツ分野に応用したScanlanら(1993a)は、スポーツコミットメントを「スポーツ参加を続ける願望と決心を表している心理上の概念」と定義し、スポーツ参加者の心理上的特徴を説明するためにスポーツコミットメントモデル(Sport Commitment Model: SCM)を用いた。また日本国内でスポーツコミットメントに関する一連の研究を行っている金崎(1992)は「スポーツへの傾倒、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入すること」とスポーツコミットメントを定義し、スポーツに参加することによって次第にスポーツへのコミットメントが形成され、スポーツ実施の安定的な継続化につながると主張した。これらの研究者の定義から、スポーツコミットメントはスポーツに専心している度合いを示し、スポーツ活動の継続性を示すひとつの概念とも言える。

スポーツにおけるコミットメントに関する研究は、個人のスポーツ活動への継続的な参加に焦点を当てた個人的コミットメント研究と、スポーツ団体や部活動などのスポーツ組織への継続的な参加に焦点を当てた組織コミットメント研究に大別される。

Scanlanら(1993a), Scanlanら(1993b), Carpenterら(1993)は青年期のスポーツ競技者を対象に一連の研究を行い、「スポーツコミットメント」「スポーツの楽しさ」「参加の機会」「個人的な投資」「社会的な制約」「参加の選択」の6因子からなるスポーツコミットメント尺度を用いてスポーツコミットメントについて説明した。数種目の競技選手を対象に個人的コミットメントを測定し、スポーツコミットメント尺度の信頼性と妥当性を確認したと報告している。またScanlan & Simons(1992)はスポーツコミットメント尺度について、スポーツの種

目に関係なく個人的なスポーツ参加を示す尺度であると述べている。Scanlanら(1993a)のスポーツコミットメント研究が基礎となり、サッカー(Carpenter & Scanlan, 1998), クリケット(Carpenter & Coleman, 1998), 体操(Weiss & Weiss, 2007)などのエリート競技選手, テニス(Casper, 2007, Casper & Stellino, 2008), ウインドサーフィン(Jeon & Ridinger, 2009)などのレクリエーション愛好者, スイミングコーチ(Raedeke et al., 2002), ヘルスクラブのフィットネス参加者(Alexandris et al., 2002)などを対象として多種多様なスポーツ種目, 技能レベル, 参加形態からコミットメント研究が行われてきた。その過程でコミットメントを構成する要素や項目の修正が行われ、多次元構造の尺度を用いて多様化するスポーツ参加者の行動を解明する手掛かりとされてきた。

国内におけるスポーツコミットメントに関する研究では、金崎(1992), 金崎・橋本(1995), 金崎(2002)は特定のスポーツ種目に限定するのではなくスポーツ活動全般に対し、一連の研究を行っている。大学生, 青少年, 社会人, 高齢者など幅広い年齢層の対象に対し、友人関係, 体育授業への取り組み, スポーツへの行為傾向など、それぞれ単次元の尺度を用いて測定している。また高峰・守能(1997)はCarmack & Martensのランニング・コミットメントの尺度項目を日本語訳し、ランニングという語をウォーキングに置き換え、ウォーキング・コミットメント尺度とした。ただ行動的変数との相関については述べられているが、因子分析などの多次元性の検討は行っていない。

前述のように海外ではスポーツコミットメントを測定する尺度として多くの研究で多次元の尺度が用いられている。さらに国内で一連のスポーツコミットメント研究を行ってきた金崎(2000)は著書の中で「スポーツコミットメント尺度はいろいろな視点から作成することが可能である」と述べ、スポーツコミットメントには多様な構成要素があり、多次元構造の可能性について言及している。しかし国内では個人的なスポーツコミットメントを多次元構造として捉える検討は行われていない。ただスポーツコミットメントモデルを用いた実証研究の中でCasper(2007)とJeon & Ridinger(2009)は競技年数,

技能レベル、性別、文化、民族によってスポーツに対するコミットメントが異なることを述べており、米国や欧州で作成された尺度を邦訳し、そのまま転用することは適切でないと考えられ、新たに概念構成と尺度作成を検討する必要がある。

2. 目的

本研究ではスポーツ参加者のスポーツ種目への専心の度合いを測定するためにスポーツコミットメント測定尺度を作成し、尺度の信頼性および妥当性について検討することを目的とする。

3. 予備調査

3.1 目的

スポーツコミットメント尺度作成に向け、スポーツコミットメントを構成する要素を質的観点から明らかにし、スポーツへの専心する度合いを測る質問項目を準備することを目的とした。

3.2 方法

3.2.1 対象者

スポーツ活動を10年以上継続して行っており、全国規模の大会に出場経験のある競技者で、指導者から推薦が得られた18歳から24歳18名を対象にフォーカスグループインタビューを行った。対象者には研究の目的、方法、録音、自由意思による参加の保証、途中中断の自由の保障を説明し、協力の確認を行い、同意を得た。またプライバシーの保護については得られたデータを研究目的以外に使用しないこと、個人が特定できないようにすることなどを説明し、同意を得た。

年齢及び性別によるバランスを考慮し、グループを4グループに分割し、実施した。1グループは司会者を含め5名または6名で構成した。

3.2.2 調査内容及び手続き

スポーツにコミットしている特定の個人の意見を抽出するためにフォーカスグループインタビューを用いた。フォーカスグループインタビューはある特定のテーマについて、選ばれた個人による形式ばらない議論であり、インタビューテーマを「スポーツに専心した理由」とし、各回60分間のインタビューを実施した。インタビューの内容はScanlanら(2003)のエリートアマチュア選手に対するインタビュー項目を参考に、主質問として「特定のスポーツに専心している要因」、「特定のスポーツを継続している要因」について行った。

3.2.3 分析方法

分析にはSPSS Text Analytics for Surveys(日本IBM社製)を用いて、以下の手順で実施した。研究者が事前にテキストデータについて繰り返し読み込みを行ったうえで、フォーカスグループインタビューから得た言語について、文字列を文法的に意味のある構成要素に分割する形態素解析を用いて語句分割を行った。次に意味内容のまとめるカテゴリ化を行った。

3.3 結果及び考察

テキストデータを分析した結果、197レコード(記述総数)から312語句が抽出された。次に得られた語句(語句総数878)について、出現率3以上の語句を対象にしてカテゴリ化を行った。その結果「他者」「称賛」「投資」「有能」「楽しさ」「機会」「継続」の7カテゴリが得られた(表1参照)。すべてのレコードのうちカテゴリ

表1 抽出されたカテゴリと語句

カテゴリー	語 句	語句数
他 者 (84)	親	17
	指導者	15
	仲間	12
	期待	11
	思い	9
	期待にこたえる	7
	存在	6
	支えになる	4
称 賛 (52)	励まし	3
	称賛	16
	周り	8
	認められる	8
	応援	6
	サポート	6
	勝利	4
投 資 (51)	ほめられる	4
	時間	15
	努力	10
	お金	11
	費やす	6
	恵まれている	3
	取り戻す	3
有 能 (44)	無駄にしたくない	3
	能力	10
	伸びる	8
	成功	7
	合っている	7
	記録	6
	うまくできる	3
楽 し さ (36)	才能	3
	楽しい	16
	おもしろい	13
機 会 (24)	好き	7
	特別な	8
	機会	8
	価値	4
継 続 (21)	友達	4
	続ける	8
	愛着	6
	長い	4
	経験	3

化された回答は、72.1% (142) に及んだ。これらのカテゴリがスポーツコミットメントを構成する具体的な内容であると考えられる。インタビューから得られた語句をもとに各カテゴリに4項目、計28項目の質問項目を作成した。作成した項目を用いて本調査ではスポーツコミットメント尺度を作成することとする。

4. 本調査

4.1 目的

予備調査の結果を踏まえ、スポーツコミットメント尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とする。

4.2 方法

4.2.1 対象者

関東地区 (2 大学)、関西地区 (1 大学)、九州地区 (1 大学) の4年生大学に通う体育・スポーツ系学科に所属する大学生を対象者とした。このうち競技会などの定期的に参加する部活動などで継続的にスポーツを実施しており、適切な回答を行った者210名 (男子163名、女子47名)、平均年齢 (SD) 19.94 (±1.46) 歳が対象者となった。信頼性を検討するための再調査では、対象者の中から九州地区の1大学に通う大学生で部活動などで継続的にスポーツを実施している55名 (男子40名、女子15名: 平均年齢18.8 (±0.62) 歳) を対象とした。

4.2.2 調査内容

性別、年齢、現在行っているスポーツ種目、継続年数、参加頻度、練習時間について調査した。またスポーツへのコミットメントを測定するために予備調査で収集された28項目を用いた。スポーツ活動について、自分の考えに最も該当するものを選択させた。回答は「まったく思わない (1)」から「かなり思う (5)」までの5段階で評定を求めた。なお妥当性を検討するために Casper (2007) や Jeon & Ridinger (2009) の研究でスポーツコミットメントの度合いによって違いが見られた技能レベルと参加頻度を指標として用いた。技能レベルについては出場している競技会のレベルを①地区大会・県大会、②地方大会 (九州、近畿、西日本など)、③全国・国際大会の3段階に分割した。また参加頻度は (①週1日、②週2から3日、③週4から5日、④週6から7日) の4区分とした。

4.2.3 手続き

研究協力者に調査を依頼し、授業時間などを利用して対象者に回答を求めた。調査は2012年8月から12月にかけて実施した。回答の所要時間はおよそ10分であった。

信頼性を確認するための再テスト調査は約4週間の間隔で実施した。

4.2.4 統計解析

分析には統計パッケージ SPSS16.0J for Windows (日本 IBM 社) を用いた。

4.3 結果

4.3.1 因子分析

収集された項目が尺度項目として適切であるかどうかについて、以下の項目分析により検討した。まず項目の反応分布において選択肢の両端に全体の7割以上を占めた項目6項目を削除した。次に22項目に対して主因子法プロマックス回転を用いて因子分析を行った。いずれの因子負荷量においても.40以下であった項目と2つ以上の因子に.35以上の負荷量を示した項目を除き、同様の因子分析を繰り返した。その結果、6因子19項目が得られた。第1因子のみが4項目で、その他の項目は3項目であった。

因子の均一性を踏まえて第1因子に属する因子負荷量の最も低い項目を削除した。項目数を統一した18項目に対し、再度因子分析を行った結果、19項目のときと同様の因子構造を示した。そこで最終的に表2に示した6因子18項目を採用することとした。

第1因子は「おもしろさを感じる」「楽しいと思う」などの項目が含まれており「楽しさ」因子と命名した。第2因子は「家族の期待にこたえたい」「指導者や友人の期待にこたえたい」など周囲の期待や他者の思いにこたえたい気持ちを示していることから「他者からの期待」因子とした。第3因子はお金、時間、努力など日々のスポーツ活動に費やしているものが含まれており「投資」因子と命名した。第4因子はスポーツを通じて得られる特別な機会や友人、価値が得られる機会を示しており「機会」因子と解釈した。第5因子は周囲から認められたり、応援されたりすることを表しており「称賛」とした。第6因子は「他のプレーヤーよりもうまくできる」「もっと上達すると思う」などの他の者よりも能力が優れていることを示していると考え、「有能感」因子と命名した。

これら18項目6因子から構成される尺度を「スポーツコミットメント尺度」とした。6下位尺度の累積寄与率は65.3%であり、分散の約6割が説明された。

続いて下位尺度間の相関係数を求めた結果、「他者からの期待」「投資」「機会」「称賛」「有能感」の間には有意な正の相関が得られた。また「楽しさ」と「有能感」の間には有意な正の相関が得られたが、「楽しさ」と「他者からの期待」「投資」「機会」「称賛」の間には有意な相関は認められなかった。

表2 スポーツコミットメント因子分析結果および下位尺度の平均値

質問項目	抽出因子						共通性
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	
【楽しさ】 $M = 12.77, SD = 2.07$							
10 () をすることにおもしろさを感じる	.97	-.03	.03	-.03	.05	-.03	.92
8 () をすることが楽しいと思う	.85	.06	.01	.01	.05	.02	.77
4 () をすることが好きだと思う	.82	.04	-.06	.01	-.03	.06	.72
【他者からの期待】 $M = 8.7, SD = 3.51$							
11 () を行うことで家族の期待にこたえたいと思う	.07	.98	.00	.02	-.10	.13	.78
18 () を行うことで指導者や友人の期待にこたえたいと思う	.02	.79	.05	.02	.02	.09	.71
17 () を行う上で親や指導者の思いや支えを感じる	-.05	.60	.04	.05	1.0	-.02	.70
【投資】 $M = 11.31, SD = 3.16$							
24 () をするために多くの時間を費やしていると思う	-.02	.00	.92	-.04	-.07	.00	.85
25 () をするためにたくさんの努力をしていると思う	-.05	.09	.80	-.07	-.01	.08	.77
3 () をするために多くのお金を費やしていると思う	.06	-.03	.78	.10	.11	.07	.46
【機会】 $M = 9.74, SD = 3.67$							
12 () を行うことで特別な機会が得られていると思う	-.07	-.02	-.04	.88	.06	-.09	.72
28 () を行うことで友人が得られていると思う	.11	.04	.00	.77	-.17	.05	.60
29 () を行うことには価値があると思う	-.04	.06	.03	.68	.09	.07	.59
【称賛】 $M = 11.42, SD = 2.87$							
23 () で活躍することで周囲の人に称賛されたいと思う	.11	-.13	.02	-.02	.95	-.10	.48
22 () を行う上で応援やサポートが得られていると思う	-.06	.29	-.05	-.11	.67	.05	.76
20 () を行うことで認められたいと思う	-.07	.04	.05	.12	.50	.16	.66
【有能感】 $M = 10.37, SD = 2.49$							
6 () が他のプレーヤーよりもうまくできると思う	.05	-.12	.15	-.01	-.08	.71	.47
27 () が他のスポーツよりも自分に合っていると思う	.02	-.08	-.08	.09	.09	.65	.46
15 () が今後、もっと上達すると思う	-.03	.29	-.10	-.11	.04	.50	.36
因子間相関							
F 1	—	.13	-.05	.21	.14	.25**	
F 2		—	.35**	.34**	.50**	.47**	
F 3			—	.27**	.44**	.29**	
F 4				—	.44**	.35**	
F 5					—	.46**	

() にはスポーツ種目名が入る

** $p < .01$

4.3.2 信頼性の検討

作成されたスポーツコミットメント尺度の信頼性を確認するために α 係数を算出した結果、表3のように.71から.92までの有意な値が得られた。また同一対象者へ

表3 スポーツコミットメント尺度の信頼性分析の結果

下位尺度	Cronbachの α 係数	再テスト法による 相関係数
楽しさ	0.92**	0.63**
他者からの期待	0.86**	0.67**
投資	0.84**	0.75**
機会	0.83**	0.71**
称賛	0.76**	0.61**
有能感	0.71**	0.75**

** $p < .01$

の再テスト法による相関係数を算出したところ、.61から.75までの有意な値が得られた。

4.3.3 妥当性の検討

妥当性を確認するために技能レベルと参加頻度における下位尺度得点の違いを一要因分散分析により検討した。その結果、技能レベルにおいては表4に示したように「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」ではF値が有意となり、技能レベルに応じたスポーツコミットメントの差異が明らかになった。そこでTukey's HSD法による事後検定を行った結果、有意な差の見られた「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」のすべてにおいて地区大会・県大会出場レベルに比べ、全国大会出場レベルの値が有意に高かった。

参加頻度においては表5に示したように「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」ではF値が有意となり、参加頻度に応じたスポーツコミットメントの差異が明らかになった。そこでTukey's HSD法による事後検定を行った結果、有意な差の見られた「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」のすべてにおいて週1日と週2から3日に比べ、週4から5日と週6から7日の値が有意に高かった。

4.4 考察

予備調査によって得られたテキストデータに対し、テキストマイニングの手法が施された。得られたカテゴリを利用して22項目に因子分析がなされ、最終的に「楽しさ」「他者からの期待」「投資」「機会」「称賛」「有能感」

の6因子18項目の下位尺度が得られた。Scanlan (1993 a) は「スポーツの楽しさ」「参加の選択」「個人的な投資」「社会的な制約」「参加の機会」の5因子を用いて「スポーツコミットメント」を説明している。項目の内容から今回の調査で得られた「楽しさ」因子は「スポーツの楽しさ」と、「投資」因子は「個人的な投資」と、「機会」因子は「参加の機会」と類似した因子であると考えられる。また、「他者からの期待」「称賛」には「期待にこたえたい」「思いや支えを感じる」「応援やサポートが得られている」などの項目が含まれることから「社会的な制約」とCasper (2008) が加えた「社会的なサポート」の項目が混在しており、項目の内容的に近い因子であると推測できる。

表4 技術レベルにおけるスポーツコミットメント得点の平均値及び標準偏差

下位尺度	競技レベル			分散分析結果	
	①地区大会・ 県大会出場 (n=63)	②地方大会出場 (n=83)	③全国大会・ 国際大会出場 (n=64)	F値	事後検定 (Tukey法)
	M	M	M		
楽しさ	13.86 (2.2)	13.34 (2.07)	13.7 (1.93)	0.88	
他者からの期待	7.58 (3.69)	8.97 (3.43)	9.5 (3.43)	3.24*	①<③
投資	9.98 (3.59)	11.51 (2.84)	12.1 (2.98)	5.31**	①<③
機会	9.6 (3.55)	10.02 (3.6)	9.48 (3.92)	0.31	
称賛	10.37 (3.26)	11.64 (2.69)	11.83 (2.65)	3.32*	①<③
有能感	9.14 (2.66)	10.88 (2.33)	10.55 (2.33)	5.48**	①<③

() 内はSDを表す

* $p<.05$ ** $p<.01$

表5 参加頻度におけるスポーツコミットメント得点の平均値及び標準偏差

下位尺度	参加頻度				分散分析結果	
	①週1日 (n=33)	②週2から3日 (n=34)	③週4から5日 (n=61)	④週6から7日 (n=82)	F値	事後検定 (Tukey法)
	M	M	M	M		
楽しさ	13.64 (2.01)	14.12 (1.98)	13.18 (2.30)	13.54 (1.92)	1.53	
他者からの期待	7.82 (3.39)	7.65 (3.27)	8.90 (3.65)	9.34 (3.46)	2.75*	①②<③④
投資	9.42 (3.95)	10.85 (3.26)	11.00 (2.86)	12.55 (2.45)	9.62**	①②<③④
機会	8.85 (3.87)	9.65 (3.34)	9.67 (3.54)	10.18 (3.81)	1.06	
称賛	10.58 (3.80)	10.82 (3.20)	11.56 (2.60)	11.91 (2.40)	2.63*	①②<③④
有能感	9.45 (2.88)	10.18 (2.49)	10.38 (2.62)	10.83 (2.15)	2.72*	①②<③④

() 内はSDを表す

* $p<.05$ ** $p<.01$

今回抽出された「有能感」因子は海外の先行研究におけるスポーツコミットメント尺度には用いられておらず、我が国独自の因子であると考えられる。そのため、行っているスポーツが他のプレーヤーより技能的に優れていたり、他のスポーツよりもうまくできたりすることがスポーツに対するコミットメントを高める一つの要素であると言える。また Scanlan らが一連の研究に用いている他の活動の重要性を問う「参加の選択」に該当する項目は今回の調査では抽出されなかった。我が国ではスポーツ以外の活動がスポーツコミットメントにあまり影響を及ぼさないものと思われる。

なおスポーツコミットメント尺度の α 係数はすべての下位尺度にて良好な内的信頼性を有することが示された。また再テスト法による再検査信頼性は中程度の値も見られたが、4週間という比較的長い間隔で実施されていることを考慮すると再検査信頼性は許容できる範囲であると考えられた。ただ再テストでは1地区のみを対象としたため、地域性の違いは検討できなかった。

妥当性については分散分析の結果、「他者からの期待」「投資」「称賛」「有能感」の4つの尺度において技能レベルの高い者の方が、スポーツコミットメント得点が有意に高い結果が得られた。また参加頻度についても同様に4つの項目の参加頻度の高い群の方が、下位尺度得点が有意に高い結果が得られた。つまり差異が見られた項目については、技能レベルと参加頻度によってスポーツコミットメントが異なることを示している。またこの結果は技能レベルおよび参加頻度が高い者の方が高いスポーツコミットメントを有しているという Casper (2007) や Jeon & Ridinger (2009) の先行研究と同様の結果である。そのため今回作成されたスポーツコミットメント尺度は、ある程度の妥当性を有していると考えられる。

本尺度の使用法としては、第1にプレーヤーがスポーツ種目に高いコミットメントを示している要因が明らかになり、指導者は個々に応じた適切な指導ができるようになる。つまりプレーヤーの高いコミットメントを維持するための指導方法やプログラムを実践する上での指標として用いることができる。第2にスポーツプログラム実施の前後に調査を実施することで、コミットメントの変化をとらえることが可能となる。つまり一定期間のスポーツプログラム内容を評価するツールとして活用することができ、スポーツプログラムの評価改善に用いることができるものと考えられる。

最後に本研究に残された課題について述べる。本研究で作成した尺度は「楽しさ」因子と他の因子との間に相関が見られていない。また「楽しさ」「機会」の2つの尺度において技能レベル、参加頻度ともに十分な妥当性を確認できなかった。特に「楽しさ」因子について Scanlan はスポーツコミットメントとの密接な関係性を

述べており、スポーツにコミットしている者ののみが感じる楽しさをより厳密に抽出する必要があると考える。身体を動かすこと自体が楽しいことであり、友達と会うことや楽しい会話ができることもスポーツの楽しさである。スポーツに取り組む目的や内容によって、「楽しさ」の内容が異なる可能性もあり、項目を見直す際に考慮すべきである。

また今回の対象者は210名と少なく、全員が大学の部活動等でスポーツを行っている。部活動に参加している学生はスポーツへのコミットメントがきわめて高い群に属していることが推測され、スポーツとのかかわりが多様な多くの対象者に回答を求めることでさらなる妥当性が追求でき、本尺度の有効性が検討できるものと思われる。

5. 結 論

本研究ではテキストマイニングによってスポーツコミットメントを構成する項目を収集した。次に得られた項目を用いて、項目分析および因子分析によって6因子（「楽しさ」「他者からの期待」「投資」「機会」「称賛」「有能感」）18項目の「スポーツコミットメント尺度」を作成した。複数の手法により信頼性は確認されたが、十分な妥当性が得られない因子があったことが課題であり、本尺度には改訂の余地が残された。

文 献

- Alexandris, K., Zahariadis, P., Tsorbatzoudis, C., & Grouios, G. (2002). Testing the sport commitment model in the context of exercise and fitness participation. *Journal of Sport Behavior*, 25(3), 217-230.
- Carpenter, P. J., Scanlan, T. K., Simons, J. P., & Lobel, M. (1993). A test of the sport commitment model using structural equation modeling. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 15, 119-133.
- Carpenter, P. J., & Scanlan, T. K. (1998). Changes over time in the determinants of sport commitment. *Pediatric Exercise Science*, 10, 356-365.
- Carpenter, P. J., & Coleman, R. (1998). A longitudinal study of elite youth cricketers' commitment. *International Journal of Sport Psychology*, 29, 195-210.
- Casper, Jonathan. (2007). Sport Commitment, Participation Frequency and Purchase Intention Segmentation based on Age, Gender, Income and Skill Level with US Tennis Participants. *European Sport*

- Management Quarterly, Vol. 7 Issue 3, 283-298.
- Casper, J. M. Stellino, M. B. (2008). Demographic Predictors of Recreational Tennis Participants' Sport Commitment. *Journal of Park & Recreation Administration* 2008, Vol. 26 Issue 3, 95-116.
- Jeon, J.H., Ridinger, L. L. (2009). An Examination of Sport Commitment of Windsurfers. *Journal of Sport Behavior*, 32, 325-338.
- 金崎良三 (1992) スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参加に関する研究(1) — スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み—, *健康科学*(14), 35-42.
- 金崎良三・橋本公雄 (1995) 青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究—中学生・高校生を対象に—. *体育学研究* 39(5), 363-376.
- 金崎良三 (2000) *生涯スポーツの理論*, 不味堂出版, 東京, 36-48.
- 金崎良三 (2002) スポーツ・コミットメント尺度の検証 — 高齢者を対象に—. *佐賀大学文化教養部研究論文集* 6(2), 239-247.
- Raedeke, T.D.; Warren, A.H.; Granzkyk, T.L. (2002) Coaching commitment and turnover: a comparison of current and former coaches. *Research Quarterly for Exercise & Sport* Vol. 73, 73-86.
- Scanlan, T. K., & Simons, J. P. (1992). The construct of sport enjoyment. In G. C. Roberts (Ed.), *Motivation in sport and exercise* (pp. 199-215). Human Kinetics. Champaign, IL
- Scanlan, T. K., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., Simons, J. P., & Keeler, B. (1993a). An introduction to the Sport Commitment Model. *Journal of Sport & Exercise Psychology*. 15, 1-15.
- Scanlan, T. K., Simons, J. P., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., & Keeler, B. (1993b). The Sport Commitment Model: Measurement development for the youth-sport domain. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 15, 16-38.
- Scanlan, T. k., Beals, K. P., Scanlan, L. A. (2003). Project on Elite Athlete Commitment (PEAK) : A Direct Test and Expansion of the Sport Commitment Model With Elite Amateur Sportsmen, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 2003, 25, 377-401.
- 高峰修・守能信次 (1997) ウォーキング・コミットメント尺度の作成と検討—ランニング・コミットメント尺度を適用して—. *中京大学体育学論叢* 38(2), 31-36.
- Weiss, W. M., & Weiss, M. R. (2007). Sport commitment among competitive female gymnasts: A developmental perspective. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 78, 90-102.